令和五年十一月

漢詩鑑賞

**十日菊**

**の**

**節去蜂愁蝶不知　　り　えて　らず**

**曉庭還繞折殘枝　　にるの**

**自緣今日人心別　　ら　のなるにる**

**未必秋香一夜衰　　だずしもはにしてえず**

【通釈】起句　重陽の節句が過ぎてしまったのを、蜂は愁えているかのよ

　　　　　　　うに飛んでいるが、蝶は気がつかないで、

　　　　承句　明け方の庭に折りなわれた菊の枝を、なおも昨日と同じ

　　　　　　　ように飛びめぐっている。

　　　　転句　(菊の色香が昨日と変ってみえるのは)今日の人の心が変っ

　　　　　　　てしまったからなのであって、

　　　　結句　花自身の秋の香りが一夜にして衰えてしまったわけではな

　　　　　　　いのだ。

【語釈】

　　十日菊…十日之菊。九月九日重陽･菊の節句の翌日の菊。時を過ぎた

　　　　　　え。これと似た六菖十菊(六日の菖蒲･十日の菊)の語もある。

　　還……また。

　　繞……めぐる。行き巡る。

　　折殘…折りそこなわれる。(折られた後に残る意ではない)

　　　　　殘は動詞の後にそえて、すたれる・損なわれるの意を表す。

【押韻】　平声、支韻。知、枝、衰、

【解説】

鄭谷 (八四二？―九一〇？)　唐、袁州宜春(江西省)の人。字は守愚。光啓三年(八八七)の進士。乾寧四年(八九七)都官郎中に至った。朱全忠の専横により終に滅亡に到る唐王朝末期を支えた政治家であり詩人。末唐の芳林十哲の一人に数えられる。

この詩は重陽の節句が過ぎて、昨日あれほど賞翫されながら今日は全く顧みられなくなった菊に同情する詩として一般に鑑賞されているが、本人には別に重陽を詠じた左のような詩があり、いずれも菊花に託して衰微する唐王朝を哀惜した詩とみることも出来る味わい深い作品です。

　　重陽夜旅懐　　　　重陽の夜の旅の懐い　　　　鄭谷

強插黃花三兩枝　　　いて黃花の三両枝を挿し

還圖一醉浸愁眉　　　一醉して愁眉を浸さんと図る

半牀斜月醉醒後　　　半牀の斜月に醉めて後

惆悵多於未醉時　　　は未醉のときよりも多し

以上